宗祖 法然上人 800回大遠忌

通信5

平成23年4月25日(月)～5月1日(日)

総本山 永観堂禅林寺

第五回 法然上人を歩く旅

法然さま、比叡山はまだまだ遠いですね！

播磨徳久から千本へ 播磨路をのんびり歩く

九月三十日(日)、第五回「法然上人を歩く旅」が実施されました。

前夜からの雨が残るかと心配されましたが当日は晴れ。猛暑の夏を越し、ようやく秋らしくなった播磨路を播磨徳久から千本まで、十六キロを歩きました。

JR播磨徳久駅で京都からのバス組と愛知・岡山・兵庫からのJR組が合流して総勢四十七名。琵琶で法然上人物語を語る古屋和子さんも前回に続いて参加。地図、行程表、資料が配られ記念撮影後、十一時二十五分出発。

JR姫新線「播磨徳久」駅に47名集合

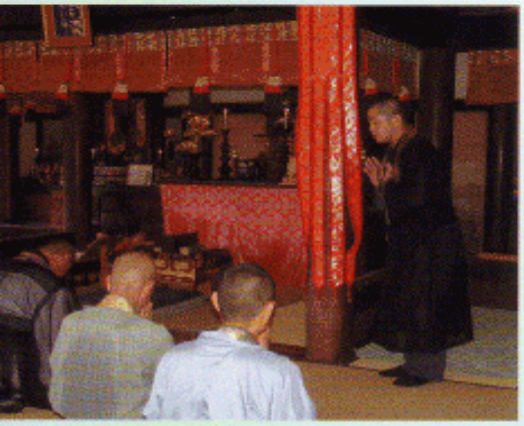
播磨徳久駅を南下して志文川ぞいに歩く。刈り取り前の黄色い稲田の畦に赤い彼岸花が咲き、白いそばの花の畑とのコントラストが美しい。一時間も歩くと汗もかき、小川のそばで小休止して昼食。前の青い山を見ながら、おにぎりをほおばる者もいれば、パンをかじる人もいる。午後再び歩き始めて、三日月の西端「新宿」に至る。ここは一九六〇年に嘉慶二年(一三八八)の年号の記された宝篋印塔がみつかっている。これによって、「播磨国風土記」にでてくる「中川駅」が当地に存在したことが裏づけられたそうです。

赤い彼岸花と白いそば畑のなかを歩く

都と伯耆・因幡を結ぶ交通路

JR三日月駅前の一七九号線を東へ行くと、山裾に抱かれるように三日月の街が広がっています。寺や神社があり農協があり、学校や公民館が建ち、かっての城下町・宿場町もすっかり現代化されています。

山裾づたいに一キロ程行くと、西山禅林寺派の寺、福仙寺があります。途中立ち寄り、本堂へお参りさせていただきました。お勤めのあとご住職から寺の歴史・概要を聞かせていただきました。横田住職の熱心な姿と坊守のあたたかいもてなしに触れ、「予が遺跡は諸州に遍満すべし　念佛を修せん所はみなこれ予が遺跡なるべし」と法然上人がおっしゃった通り、ここにもその教えが弘通し、息づいていました。



福仙寺で横田住職から寺の説明をうける

三日月から猪ノ谷を超えてゆくと相坂口にきます。このあたりから登りにさしかかり相坂峠へと登ってゆきます。山越えをすると息も弾み、道端の石垣に腰をかけて小休止。承久の乱に敗れた後鳥羽上皇が、隠岐へと下る途中に「立ち帰り越しゆく関と思はばや都にききし逢坂の山」と詠んだと伝えられる峠です。坂をくだると鍛冶屋という村を通り、西栗栖駅を越え一路千本をめざし、田園地帯を歩く。

午後四時十四分先頭がJR千本駅に到着。やがて五分程して全員が無事到着いたしました。

今回は、「分け入っても分け入っても青い山」と山頭火の句を味わう旅でした。

相坂峠下で小休止

「法然上人と今、すべてのいのち」東京大会
増上寺でいのちの尊さと念佛の大切さを訴える！

秋晴れの東京・芝増上寺で、平成十九年十月四日、法然上人800回大遠忌記念「法然上人と今、すべてのいのち」東京大会が開かれました。西山禅林寺派永観堂として、首都圏でこのような大規模なイベントを展開するのは初めてです。大殿を埋め尽くした五百人の聴衆を、法然上人にまつわる法話と法要と琵琶による語りで魅了し、首都圏の檀信徒に大きな感動を与えました。

増上寺大殿

意義ある東京での開催

芝増上寺大殿内に東京・圓光寺の檀信徒さん二百人を中心に首都圏にある西山禅林寺派の檀信徒および関係者が集まり、その数四百八十人。平日にもかかわらず五百席用意された会場はほぼ満席という盛況になりました。

今回、増上寺大殿をお借りして催すことができたのは、一昨年、鬼頭宗務総長と増上寺前執事長、故江口定信師との約束で実現したものです。

その後、増上寺法主成田有恒台下、楠見知仁執事長はじめ一山のみなさまに荘厳、佛具、施設、および人的提供をいただき実現したものです。同じ法然上人を宗祖と仰ぐもの同士がガッチリと手を組み、歩めたのも、法然上人の御遺徳の賜物と考えられます。

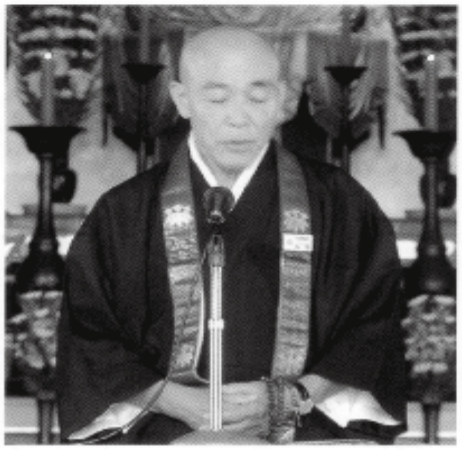
お念佛の心を伝えるために

法然上人の最後のご遺訓ともいえる「一枚起請文」を記念大会の最後に会場全員で合唱しようという意図のもとに開会に先立ち、京都恵光寺の住職岸野亮淳師が「一枚起請文」の解説と練習を行い、本番に備えました。

梵鐘が三打、打ち鳴らされ、司会の柏木アナウンサーが登場し、開会を告げ、いよいよ記念大会が始まりました。

法然上人の平等の精神を

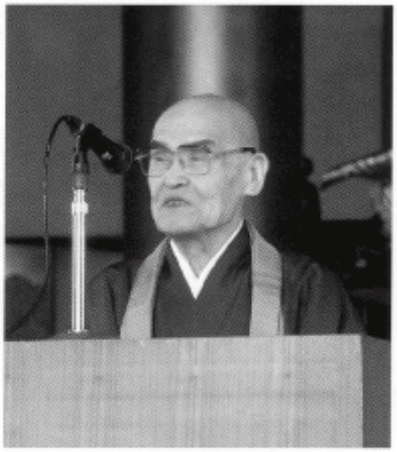
まず宗派を代表して鬼頭誠英宗務総長が挨拶にたち、増上寺様へお礼を述べたあと次のように語りました。


鬼頭誠英宗務総長の挨拶

『往々にして貧困が争いや紛争の直接的原因と言われますが、その根底には当事者の価値観や世界観の相違があります。今日の日本の現実を見ますと、多くの人が所得格差、情報格差、男女格差などの拡大の前に、倫理観の欠落した利益追求が目立つ競争社会になっています。いまこそお念佛の教えの原点に立返ることが私たちに求められています。人も自分も平等になり、その解決を求めているのが人としての本来の姿です。

競争社会で、勝ってあたりまえでは人間社会は成り立ちません。あらゆる存在も単独ではありえず、相互に寄り合って成り立っています。自分の幸せの追求がそのまま人の幸せにつながるものであるはずです。法然上人の教えは、「他力」即ち自らの計らいをせず阿弥陀様のいのちの働きを受け、光明慈悲に等しく照らされ、等しく抱かれて、皆と一緒に歩んでゆくものです。今日一日、法然上人の御心にふれていただければ幸いです。』と語り、口火をきりました。

続いて、今回増上寺大殿をお貸しくださった増上寺法主成田有恒台下からご祝辞を承りました。



増上寺法主 成田有恒台下祝辞

法然上人の平和の願いを

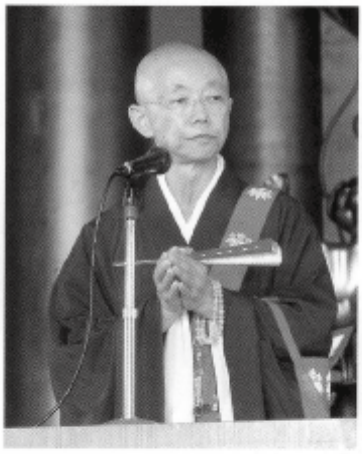
ご承知のごとくこの増上寺は、徳川家康公によって建てられました徳川家の菩提所でございます。この大殿のすぐ裏手に歴代将軍のお墓がございます。そのなかに一人だけ女性のお墓が混じっています。もちろん、将軍様ではありません。第十四代徳川家茂将軍の奥様静寛院宮とおっしゃいます。この方が公武合体、あの幕末の動乱の時、なんとしても戦争はさけたい、天皇家と将軍家が争うようなことがあってはならない。そしてはるばる関東の地にお輿入れになった訳でございます。単なる政略結婚ではございません。このご夫婦は誠に愛し合い、しかも共通の願い、徳川家の菩提所の宗派でございました法然上人の絶対平和の思想が基本になっております。

将軍家茂公が二度にわたり京都を訪れた留守に、静寛院宮はこの境内でお百度を踏みながらお念仏を唱えたという言い伝えがございます。ご主人の身の安全はもちろん、なんとしてもこの国の平和体制を守り抜きたい。

「いかようにも人と相争うこと　ゆめゆめ候ふまじく」これは法然上人様のお残しになったお言葉でございます。近づいてまいりました八百年大遠忌には、法然上人様の思想「平和」を世界に広めていかなくてはならないことでしょう。

尊いいのちを生かされて

最初の法話は、愛知県櫻誓願寺住職近藤玄城師、「生かされる　このいのち」と題して、お話になりました。



近藤玄城師の法話

『生かされて生きるというのが私のテーマですが、単に生きているというだけでは、人間としてまだまだ。自分のいのちはどういうものか、深く自分を考えたとき初めて生かされるという言葉が出てくるのです。

自分の力で毎日生きていると思うのは大間違いです。目に見えない大きな力に抱かれている。また他人様からいろいろお世話になっている。あらゆる人の世話になって自分が今ここにある訳です。「生かされる」ということを考えたら、八百数十年前に法然上人が私どもにお念佛の教えを示された、特に口に出して「南無阿弥陀佛」と唱える称名念佛をお勧めになった。生かされているという気持ちがわいたときこそ、心の底から「南無阿弥陀佛」と自然と出てくるのです。その、「南無阿弥陀佛」と唱えたお念佛の教えが分かるのは、自分が生かされていると思ったときなのです。そのときやっと本当のお念佛の心がわかるのです。

「月影のいたらぬ里はなけれども
　　ながむる人のこころにぞすむ」

法然上人のお歌ですが、私は太陽は生きる象徴であり、月はいかされる心の象徴だと思っています。

光がなかったら生き物は生きていけません。それに比べて月は日の光をいただいて輝くので自分が輝くわけではないけれど必要です。月を眺めて、自分も生かされているという気持ちを持てたら、念佛が自然とでてきます。どうぞ、生かされている自分だということを忘れないようにしていただきたいと思います。』と締めくくられました。

念佛できる幸せをかみしめて

続いて、兵庫県大覚寺住職中西玄禮師が「生きがいの旅路」と題して、お話になりました。冒頭に「ハンカチおじいちゃん」で笑わせ、観客の心をつかむと次のように続けられました。

中西玄禮師の法話

『人間七十になりますと、二つのタイプに分かれます。いい人と言われているか、いけない人と言われているかどちらかです。これをもう少しくわしく言いますと、五つにわけられます。

いけない人と言われているのがいちばんいい。あとの四つはみないい人なのです。悪い人は一人もいない。このいけない人というのはどう言う人かと言いますと「いなければいけない人」なのです。

たとえ寝たきりでも「おばあちゃんあんたがいてくれるからこの家はもっているのよ。あなたのその笑顔がこの家を明るくしてくれるのよ。」これが一番いいんです。二番目は、いた方がいい人……三番目はいてもいなくてもいい人。四番目はいないほうがいい人。五番目はもっとひどい、死んだ方がいい人。この世にいない方が世の中のためだと。（中途略）

檀家の「はるこさん」というおばあさんは、七十過ぎて息子と同居するようになりましたが、パーキンソン病になり、手足が不自由で、リハビリをかねて写経

をしておられました。亡くなられた後、枕元の写経のなかから一枚の紙が出てまいりました。「長い間使わせていただいたこの両手、佛様からお預かりしていましたが、だんだん動かなくなりました。どうやらお返しするときが近づいてきたようです。でも、よい手ありがとうございました。南無阿弥陀佛。」

息子さんは「母親がこんな思いでいるとは思いませんでした。つらい思いをしているだろうとは思っていましたが、この佛様への手紙を読んで、私は安心しました。これは私たちへの遺言です。たとえ体が不自由でも、目が見える、耳が聞こえる、ふるえながらも手が動く、その事に感謝しながら母はお念佛を唱えていたのですね。」

本当の生きがいとは、このおばあさんのようにたとえ両手がふるえてもまだ手を会わす事ができる。

お念佛のなかに私と阿弥陀様のいのちがピタッとひとつに寄り添いあっていくという本当の幸せな姿がそこに存在するのです。それが「南無阿弥陀佛」だと、法然上人が私どもにお示しになったことです。この世を生きていく生きがいがその六字のなかに込められているのです。そのお念佛を唱えられる幸せを、私どもしっかりと心のなかに味わいながら人生を歩んでいきたいと思います。』と語られると、聴衆はすっかり話に魅せられ、くい入るように聞いていました。

壮大なる雰囲気のなか厳かにつとめられる記念法要

記念法要を華麗に展開

「先請弥陀～」と発声しながら、大殿の内陣を後門からすべるように入道場した式衆。小木曽善龍管長を中心に禅林寺派法事部十五名、佛を礼拝讃嘆するごとく、伽陀、無言三拝を行い、四奉請では、天井から散華が舞いおり、式衆がまいた華と同化する。

よく整えられた声の調子、荘厳な響き、統一された所作の美しさ…法然上人８００回大遠忌記念を飾るにふさわしい特別法要でした。お勤めのあと、「御親教」で小木曽善龍管長は次のように述べられました。

小木曽善龍猊下の御親教

『念佛は阿弥陀様の御本願でございます。阿弥陀様を信じて一日を念じ念佛するものは、どのような境遇におかれましてもかならず救いをうけるのであります。楽しければ楽しいなりにお念佛、悲しければ悲しいなりにお念佛、苦しければ苦しいなりにお念佛、両手をあわせて南無阿弥陀佛と佛を念じますならば、やがて恩しゅうの彼方に必ず幸せの平和の光がおがめます。

そして平成二十三年は法然上人８００回大遠忌御祥当でございます。このときを逃がしたら私たちは法然上人に会えないのです。あと四年先です。その間にお迎えがきたら、大法要がすむまでは行くなと言われたから、まだ行かんと断ってください。

平成二十三年にもう一度みなさんと本山で会いましょう。』と結ばれ十念を唱えられると、聴衆もおもわず唱和し、期待に胸をふくらせました。

入道場する式衆

第二部は、古屋和子さんによる琵琶で語る「法然上人物語」。

八百年前に引き戻される古屋世界

「祇園精舎の鐘の声　諸行無常の響きあり」で始まり「月影のいたらぬ里はなけれども　ながむる人の心にぞすむ」で終わる四十五分間の法然上人の一代記。

琵琶で語る古屋和子さん

末法八十一年、勢至丸は美作の国（岡山県）で生まれ、幼くして父、漆間時国が明石定明に殺されるというめに遭う。父の遺言「敵は討つな。敵を恨んではならぬ。敵は敵を生んで尽きることなし。わしの菩提を弔い、自己の解脱を求めよ」という言葉を信じ、出家し、比叡山に上る。比叡山で万巻の経典を読み、修行するも疑問をいだき、十八歳で名聞利養も入らぬ遁世念佛の生活をと西塔黒谷の叡空上人のもとに入る。高僧の地位が家柄や身分で決められた当時の比叡山に希望をいだけなかったのであろう。

二十五の年、源空は山から下り、嵯峨清涼寺の釈迦堂に七日間参籠する。そこで目にしたのは、争乱の予感に怯え、乱世を生きねばならない苦しみを嘆き、生きる光を必死で求める庶民の姿だった。この人々を救う道はないのか？

ある夜、源空は善導大師の著した観経疏を読んでいると、「一心に専ら弥陀の名号を念じて行住坐臥に、時節の久近を問わず、念々に捨てざる　これを正定の業と名づく。彼の佛の願いに順ずるが故に…」これだ！弥陀の名号を念ぜよ。散善義の一節であった。源空は勉学と修行を重ね、ついに専修念佛の教えに至った。

三十年の月日が流れ、法難にあい土佐に配流になり、赦免され京に戻り善惠房証空との再会、選択集の撰述のときの勧文の役の思い出話などを、そして最後の入滅のシーンが琵琶の響きにのせて語られていきました。

ひそやかに、また激しく奏でられる琵琶の音にのって一心に語られる法然上人の物語は、会場のすべての人の心を揺さぶり深い感銘をあたえました。

有終の美をかざった『一枚起請文』

満場の拍手が鳴り止み、ひと呼吸おいて、古屋さんがそれではみなさん、最後に、法然上人の最後に残されました「一枚起請文」をご一緒に唱和したいと思います。というかけ声とともに本山役員、教宣部、法事部部員が登場、鬼頭宗務総長も会場の聴衆と一体となって、みんなで「一枚起請文」を唱えました。堂内全体が法然上人の言葉をかみしめるように、一節一節唱和し、お念佛のありがたさを体で感じ、法然上人８００回大遠忌記念大会にふさわしいフィナーレを迎えました。

有終の美を飾った「一枚起請文」

この感激を大遠忌祥当まで

最後に、浄土宗西山禅林寺派東京出張所長　圓光寺住職　内藤壽昭師が閉会の挨拶を述べられました。

「みなさん、浄土宗の宗祖が法然上人であることはご存知ですけれども、法然上人がどういう経歴の方なのか、どういう業績があるのか、その教えはどういうことなのかについては、多分あまりご存知ない方が多いのではないかと思います。しかし、今日ご参加いただいて、古屋さんの琵琶による法然上人物語でその経歴についてわかっただろうと思います。また、法話についてもその教えがおわかりいただけたと信じます。最後に「一枚起請文」をみんなで声高らかに唱えて盛り上がりましたが、この感激を平成二十三年の法然上人８００回大遠忌祥当にむけてそのまま持ちつづけていただきたいと思います。

最後に、この会場をお貸しいただいた成田法主をはじめ増上寺の関係のみなさま、暖かいお気持ちに感謝の念を捧げたいと思います。」

閉会の辞　内藤壽昭師

法然上人への絵手紙募集

法然さま、絵手紙で教えていただけますか？

法然上人は庶民の悩みに懇切丁寧に答えています。それをまとめたのが『一百四十五箇条問答』です。それを読むと、八百年前の人たちがどんなことに悩んでいたかがよくわかります。今日も悩み深い時代です。法然さまにたずねたら、どうお答えなさるのでしょう？　ぜひ、絵手紙でたずねてみてください。

法然さんに絵手紙を出すという想定で、未来への想いを語っていただきたく、十月から絵手紙募集を開始したところ全国から傑作が寄せられています。自分の願い、希望、悩み、疑問、信念、主張……いろいろあります。十二月三十一日にしめきりますので、お早めにご応募してください。応募作品のなかから、優れた作品に賞をさしあげます。

応募方法

はがき大に絵手紙を書き、封書〈個人情報保護の為〉で郵送してください。彩色、画材自由、絵に一言添えてください。テーマは「法然上人と今、すべてのいのち」〒番号、住所、氏名〈ふり仮名〉、電話、FAX番号、年齢、性別を明記。応募点数に制限なし。

◆最優秀賞／硯〈一本〉　◆優秀賞／墨〈三本〉

◆佳　作／筆〈十本〉発表は来年二月上旬入選者に通知します。

応　募　先／永観堂禅林寺「宗祖法然上人800回大遠忌」事務局

※選　考／宗祖法然上人800回大遠忌事務局にて選考決定します。

※諸権利／応募作品の著作権は、主催者に帰属します。

応募作品の一例

愛知県　女性（28才）

沖縄県　男性

京都市　男性（73才）

京都市　女性（10才）

千葉県　男性（47才）

「宗祖法然上人800回大遠忌」記念事業盛り上がる！

「法然上人と今、すべてのいのち」東京大会は、去る十月四日（木）、東京都港区芝増上寺で開催され、大きな感動と法悦をあたえ成功裡に終わりました。引き続き来年十月三日に岐阜大会を開催する予定です。

また、「一枚起請文」写経運動も盛り上がりを見せ、全国から写経されたものが本山に納められています。

「法然上人を歩く旅」も、第五回を九月三十日に実施し、八十キロを踏破し「千本」まで歩みをすすめました。

この秋から始まった「法然上人への絵手紙募集」は力作、傑作が本山に寄せられています。

お待ち受けの「特別記念法要」は北海道・岐阜・愛知・福井・京都など三十一箇所で実施され好評を得ています。

来年は岐阜大会を実施

全国檀信徒に感動をあたえ、お念佛の輪をひろげましょう。

宗祖法然上人800回大遠忌記念「法然上人と今、すべてのいのち」岐阜大会は、来年十月三日〈金〉岐阜羽島文化センターで開催されます。兵庫県と東京で開催され、多くの檀信徒に感動と夢をあたえたあのドラマを岐阜へ持ち込み、岐阜の檀信徒の方にお届けしたいと願っています。そして平成二十一年には愛知大会、平成二十二年には京都大会を開催し、念佛の輪を広げたいと思います。

「一枚起請文」写経運動

法然上人の「一枚起請文」を全国にひろめましょう。

専修念佛の要旨が簡潔に説かれている「一枚起請文」。その写経運動も大きなうねりとなって全国に広がっています。

写経セットとして売れた数、二千六百三十七、写経して本山に奉納された数二千〈十月三十日現在〉。御影堂に開設された納経庫に、全て回向されて、一年間奉納されます。小さなお子さまにも書けるように「かな」の一枚起請文も含まれています。ぜひ、お子さまにもおすすめください。

法然上人への絵手紙募集

念佛する喜びに気づかれた法然上人の目線に立って、この喜びを未来に伝えましょう。

特に青少年の方に、八百年前の法然上人さまに手紙を出すという仮想のなかで、未来への想いを語っていただくというもの。毎日の生活で感じていること、また、日ごろ疑問に思っていること……

法然さんに尋ねたら、どうお答えなさるのでしょう。ぜひ、絵手紙で尋ねてみてください。第一回の募集の締め切りは、十二月三十一日です。応募作品のなかから優秀作品を選び賞品を贈ります。

法然上人を歩く旅

法然上人の行跡を顕彰し、その功績をしのびましょう。

誕生寺を出発してから十一ヶ月、この九月に播磨路の「千本」までやってきました。津山から出雲街道にはいり、すでに八十二・五キロを踏破、これから山陽道に入り、西宮から西国街道を通り京都へ向かいます。

第六回は、十二月九日〈日〉千本から本龍野まで十六・五キロを歩きます。

第七回は、平成二十年三月九日〈日〉本龍野から姫路まで十九キロを。

第八回は、平成二十年五月十一日〈日〉姫路から東加古川まで二十三・五キロを歩く予定です。

発行所
宗祖法然上人800回大遠忌記念事業事務局
〒六〇六－八四四五　京都市左京区永観堂町四八
電話　〇七五－七六一－〇〇〇七
FAX　〇七五－七七一－四二四三
Eメール　zenrinji@eikando.or.jp
二〇〇七年十二月一日発行